**第1号議案**

**第7期事業報告及び決算の承認について**

**令和元年度**

**令和元年7月1日から令和2年6月30日まで**

**事 業 報 告**

**当該事業年度における事業活動の概況**

**１　主要な事業活動の報告**

**（１）総務（会計・経理事務を含む）**

決算・上半期、下半期監査の実施、定例・臨時取締役会の開催、会計事務・月次監査・構成員への支払事務等を定期的に処理しました。特に、構成員所得の最大化に向け、各作物の品代と交付金・地域資金の活用、地域特性に応じた作付けの各集落提案や団地化の推進を実施し、更なる法人化のメリット発揮に取組み実績を残す事が出来ました。

今年度は、平成25年設立当初の農地賃借契約が満了となりましたが、構成員から引続き農地賃借契約の要望もあり農地中間管理機構を活用した農地賃借契約を関係機関の協力の下、契約手続きを行いました。説明会及び、今年度契約を令和元年10月から令和2年3月に実施し、契約数815件、契約面積156.8ｈａとなりました。

令和元年度は、米、麦、大豆、飼料米・ＴＭＲ他の純売上高は、107百万円で、受け入れた交付金等は、436百万円です。これらを原資に肥料、農薬、カントリー・コンバイン利用料等の生産費を控除し、圃場から生み出された収益の全額を作業委託管理料や農作業賃金等として総構成員配分額303百万円をお返しすることができました。

これに対し、役員報酬、職員の賃金、各オペレーターの保険料、集落運営費等の一般管理費については、本社が利用権を設定し経営する農地からの収益や、農作業受託料金、また、消費税の還付等の雑収益で賄うことができました。

決算では、利益の中から、将来の設備投資に備え、無税で積み立てることができる経営基盤強化準備金3,000万円を繰入するとともに、各集落の持株会から拠出いただいた資本金に対し、今年度も株主配当を予定しています。

**（２）運営**

取締役、各班長（東部地区農地管理班・西部地区農地管理班・本社農地管理班・機械、倉庫運営管理班・ＴＭＲセンター運営管理班）を中心とし、各集落単位での運営を基本に集落間連携及び集落本社間の連携を図りながら、定期諮問会議（班会議）並びに定期取締役会を執り行い、目前の課題や、中長期的な経営ビジョンを検討審議し、効率的な運営体制に取り組んできました。

食育体験としては、地域の園児・児童による麦踏みフェスティバルや田植え、稲刈り体験を実施しました。幼稚園・保育園・小学校の関係者より御礼のお手紙等を頂き、毎年の恒例行事となっています。麦踏みフェスティバル・稲刈り体験の時には、女性部の皆様の多大なご尽力のお陰も有り、無事に執り行うことが出来ました。

**（３）作付・栽培・実証研究**

　令和元年度作付実績は、小麦111.4ｈａ,大麦126.0ｈａ、大豆119.4ｈａ、主食用米4.9ｈａ、飼料用米(ＳＧＳ用)60.1ｈａ、飼料用米(玄米)9.1ｈａ、ＷＣＳ72.0ｈａ、飼料作物50.9ｈａとなりました。

　　　飼料用米(ＳＧＳ用)は、主食用米より経済的な優位、早期の収穫が見込める等、管　理し易い利点もあり、作付面積が増加しています。

　　　大豆はここ数年、異常気象により大幅な減収となり、営農継続払での支払のみとなりました。しかしながら、構成員への配分額は産地資金交付金並びに共済金の支払により、以前と変わらない配分額となりました。

　　　麦に関しては、ネットワーク大津㈱にとってウェイトの高い作物なので、県やJA指導の下、多収性・品質改良等に努めました。令和元年度は東部地区6集落で、麦の赤カビ防除をドローンで行いました。その結果、少人数で作業が進み、時間の短縮・コスト削減へと繋がりました。

　　　また、実証試験でこれまで乗用管理機で行っていた水稲除草も一部ドローンで行いました。今後は防除だけに止まらず、除草剤散布や追肥等、ドローンを活用して作業の幅を広げていきます。

[育苗施設]

令和2年5月から6月までの2ヶ月間、当社育苗ハウスで、主食用米を中心とした水稲の苗を約660枚栽培しました。覆土の関係で、丈が多少不揃いな部分が見受けられましたが、根張りの良い丈夫な苗が出来ました。

また、今回より平成30年度の実績を踏まえ、㈱熊本野菜育苗センター(大津町岩坂)に夢あおばを全数委託しました。本格的な委託となった令和元年度は約12,000箱を生産し、綺麗に芽の揃った苗を納品して頂きました。

[実証試験研究]

ネットワーク大津㈱のスマート農業への取組や、低コスト生産実現の為に下記の実証試験を行いました。

1.肥料入り苗箱試験

令和元年度から、苗箱内に肥料を入れ育苗を行い、本社小作地5.5ｈａに作付をしました。この試験により肥料散布の作業工程が不要になり構成員の肥料代等の負担が減少しました。しかし、結果は苗の根張りが良くない等改善点があり、来年度も継続する事となりました。

2.麦後の水稲乾田直播栽培実証試験

飼料用米(ＳＧＳ用)の乾田直播栽培では、育苗及び代かきを行わないため、労働力の軽減となりました。

しかし、代かきを行わないことで肥料もちが悪くなり、また、雑草が増え除草剤散布が増加しました。

今回、満足のいく収量結果ではではありませんでしたが、今後は作業の集中する時期をずらし農繁期の作業工程を分散させ、課題を克服していきながら、来年度も継続していく事となりました。



**（４）自給飼料活用型ＴＭＲ（混合飼料）供給事業**

令和元年度ＴＭＲ出荷実績は1,309ｔとなり、内訳は水の恵みＴＭＲ1号101ｔ、水の恵みＴＭＲ2号254ｔ、水の恵みＴＭＲ3号587ｔ、試験用ＴＭＲ144ｔ、搾乳用ＴＭＲ223ｔとなりました。

また出荷戸数については、繁殖牛飼養農家5戸、肥育牛飼養農家4戸、搾乳牛飼養農家1戸の計10戸となります。

前年度から稼働を開始したＴＭＲ製造ですが、販売農家向けに開催した検討会が盛況で終了したこともあり、その後の販売戸数も順調に増加いたしました。また生産についても作業員の習熟が上がり、１日辺り20～40ｔほど製造するまでに至っております。試験用ＴＭＲにつきましては、熊本県農業研究センター畜産研究所より肥育牛の全ステージＴＭＲ給与試験用ＴＭＲ、同センター草地畜産研究所より寒地型牧草及び高原野草を活用したＴＭＲの製造依頼を承りました。

